

# 基調講演 「江戸の漢詩と中国古典」

石川 忠久

二松学舎大学大学院教授

はじめに

日本人が漢詩（中国の古典詩）を学びはじめたのは、おそらく遣隋船・遣唐船の往来が繁くなった七世紀初頭からのことであろう。中国では、ちょうどそのころ、詩が熟成し、完成に向かっていった。すべての詩形（五・七言絶句、五・七言律詩、五・七言古詩）が整い、音声上の規則（平仄式）が定まったのは、およそ八世紀初頭のころである。『詩経』の詩の発生より数えれば、二千年を閲したことになる。

長い年月をかけて、形式を整え、修辞を練り上げ、題材を広げてきた高級な詩歌に接し、日本人は目眩く思いでこれを学ぼうとしたに違いない。751年（孝謙天皇の天平勝宝3年）には、早くも最初の漢詩集『懐風藻』が編纂された。あたかも李白や杜甫が活躍していた唐詩の最盛期である。さすがに高級な詩歌を修得するのは容易ではなかったものと見え、『懐風藻』の詩は、これより百五十年から二百年ほど以前の、中国六朝期の風を帯び、ほとんどが五言詩である。精一杯の学習の姿を見せた、というところである。

九世紀に入ると、矢つぎ早に、『凌雲集』（814年）、『文華秀麗集』（818年）、『経国集』（827年）の勅撰三集が出され、七言詩も増えて、堂々たる進歩の姿を見せるに至る。その修得の速さは目を瞠るに足る。そして、この世紀の末に日本漢詩最初の大詩人菅原道眞が現れる。

菅原道眞（845～903）は、最後の遣唐大使に任命されたが、行かなかった。唐王朝はすでに衰え、混乱の状態に陥っていたので、あえて危険を冒すことを避けたこともあるが、漢文訓読法も発明され、もはや直接指導を受けずとも、自由に読み、且つ作れる自身がついた、と見てよいのではあるまいか。道眞の詩は白居易（字は樂天、772～846）をよく学び、その風を得たとされる。道眞の出現は、日本漢詩自立の象徴と捉えることができよう。

漢詩文は王朝貴族たちの欠くべからざる素養として修得され、この素養の根底の上に、和歌、物語、日記、隨筆などの独自の文化が花開いていった。武士の時代になってもその素養は受け継がれたが、やがて鎌倉・京都の禅寺（五山）の僧侶たちによって、高い水準に保たれてゆく。中でも、南北朝末期の絶海中津（1336～1405）と義堂周信（1325～1388）は傑出した存在であった。五山では独自に中国の漢詩文集の出版も行われている（これらを「五山版」と呼ぶ）。

戦国の乱世を収めて、徳川幕府が開かれ（1603年）、文治政策が推し進められると、“日本漢詩文”の様相もしだいに変化し、熟成に向かう。日本人が漢詩を修得しはじめた遣唐船の往来の時期よりちょうど千年を閲したことになる。江戸時代を、開府より天和・貞享のころ（1603～1687）までを第一期（発展期 仮称、以下同じ）、元禄より明和ごろ（1688～1771）までを第二期（展開期）、安永より天保ごろ（1772～1844）までを第三期（熟成期）、弘化より幕末（1845～1868）を経て明治中期（1895年ごろ）までを第四期（爛熟期）として、以下いくつか例を挙げて見ていく。

第一期（発展期）

林羅山（1583～1657）の例

武野晴月

武陵秋色月嬋娟  
曠野平原晴快然  
輻破青青無轍迹  
一輪千里草連天

武陵の秋色 月嬋娟  
曠野平原晴れて快然たり  
青青を輻破するも轍迹無し  
一輪千里 草 天に連なる

武野草月

月出武陵原上東  
風光草際映長空  
水輪雖輻青青破  
無迹無辺白露中

月は出づ 武陵原上の東  
風光草際長空に映ず  
水輪青青を輻破ると雖も  
迹無く辺無く白露の中

上の二首の詩は、次の唐の鄭谷（842？～910？）の詩を踏まえている。

曲江春草 唐・鄭谷

花落江堤簇暖煙 花落ちて江堤に暖煙簇る  
 雨余草色遠相連 雨余の草色遠く相連なる  
 香輪莫輾青青破 香輪青青を輾り破る莫かれ  
 留与遊人一醉眠 遊人に留与して一たび醉眠せしめよ

鄭谷の詩は、唐の都の長安で、落第書生が曲江の堤の春草に酔って寝ころんでいるところへ、及第した進士の車が通る、それへ向かって「立派な車よ、青青とした草を輾り破るな、私の醉眠のために残してくれ」という意。羅山の詩は、月を車に見立て、青空を草原に見立てて鄭谷の詩句を取り入れたところがミソである。ただ、取り入れ方が生(そのまま)で曲がなく、二首とも同じ趣向であるのは、未熟の誹りを免れまい。「風光草際」は六朝の謝朓(464~499)の句の語。その他、「曠野平原」(意味重複)、「原上東」(二重に場所を示す)なども未熟な表現と言えよう。

新井白石(1657~1725)

白石の詩は、格段に進歩の跡を示し、第二期への橋渡しの役を果たした。

即事

青山初已曙 青山初めて已に曙け  
 鳥雀出林鳴 鳥雀林を出でて鳴く  
 稚竹煙中上 稚竹煙中に上り  
 孤花露下明 孤花露下に明かなり  
 煎茶雲繞榻 茶を煎れば雲は榻を繞り  
 梳髮雪垂纓 髪を梳れば雪は纓に垂る  
 偶坐無公事 偶坐して公事無し  
 東窓待日生 東窓日の生ずるを待つ

首聯(最初の二句)は、唐の韋応物の詩に「青山忽已曙 鳥雀繞舍鳴」(青山忽ち己に曙くれば、鳥雀舎を繞りて鳴く)とあるのを取り入れたもの。また尾聯(最後の二句)は、唐の賀知章の「偶坐為林泉」(偶坐するは林泉の為なり)と、宋の程顥の「睡覺東窓日已紅」(睡覺めて東窓日已に紅なり)を取ったもの。取り方は、まだ生だが、この詩は中の二聯(頷聯と勁聯)の対句が、表現といい構成といい練られたもので、日本的美意識も感ぜられる。

第二期(展開期)

服部南郭(1683~1759)

夜下墨江 夜 墨江を下る  
 金龍山畔江月浮 金龍山畔江月浮かぶ  
 江揺らぎ月湧いて金龍流る 江揺らぎ月湧いて金龍流る  
 扁舟不住天如水 扁舟住まらず 天 水の如し  
 兩岸秋風下二州 兩岸の秋風 二州を下る

南郭の師、荻生徂徠(1666~1728)は明の古文辞派の主張を鼓吹し、盛唐の詩風を模した。この南郭の詩も、李白の詩風を襲い、思い切った誇張の表現で、気格の大きい詩趣を出すのに成功している。

第三期(熟成期)

頼山陽(1780~1832)

泊天草洋 天草洋に泊す  
 雲耶山耶吳耶越 雲か山か吳か越か  
 水天髣髴青一髮 水天髣髴青一髮  
 万里泊舟天草洋 万里舟を泊す 天草洋  
 煙横篷窓日漸没 煙は篷窓に横たわりて日漸く没す  
 瞥見大魚躍波間 瞥見す大魚の波間に躍るを  
 太白当船明似月 太白船に当って 明 月に似たり

この詩は、最初の二句に先人(韓愈、白樂天、蘇東坡、長崎の詩人吉村迂斎)の影響が見られるが、詩全体としては平易な表現で、海の夕景に溶けこむノスタルジー、を詠い上げている。元来、中国の詩の世界に「海」はほとんど詠われることはなかった。海は地の果て、という風土の然らしむところであろう。李白も、杜甫も海を見たことはない。日本でも、海に囲まれた風土でありながら、中国の手本がないためか長い間「海」の詩はなかった。それが、江戸へ入って新しい詩材として取り上げられ、ここに至って独自の作品が生まれたのである。景と情の渾然たる溶け合いが、スケールの大きい詠いぶりで見事に完成した。まさに、日本漢詩の金字塔である。

第四期（爛熟期）

藤井竹外（1807～1866）

芳野懐古

古陵松柏吼天 <sup>颯</sup>	古陵の松柏 <sup>てんびょう</sup> 天 <sup>颯</sup> に吼ゆ
山寺尋春春寂寥	山寺 春を尋ぬれば春寂寥 <sup>せきりょう</sup>
眉雪老僧時輟帚	眉雪の老僧時に帚 <sup>ほうき</sup> を輟めて
落花深处説南朝	落花深き処 南朝を説く

「芳野（吉野の雅称）」は、この時期に流行した詩題である。南朝の事跡と桜の二つを柱にして詠ずる。この詩も後醍醐天皇の御陵と桜の花吹雪が詠われている。御陵を護る松柏にゴオーとつむじ風が吹きつけ、山寺（如意輪寺）では老僧がしずかに落花を掃き寄せつつ、南朝の物語をしてくれた、という詩意であるが、この詩には基づく唐詩がある。

行宮	唐・元稹
寥落古行宮	寥 <sup>いしえ</sup> 落 <sup>あんぐう</sup> たり 古の行宮
宮花寂寞紅	宮花寂寞として紅なり
白頭宮女在	白頭の宮女在り
閑坐説玄宗	閑坐して玄宗を説く

今はさびれた行宮に、老いた宮女が静かに坐って、過ぎにし玄宗皇帝華やかなりし日の物語をしてくれた、という内容である。竹外の詩がこれに基づいていることは一目瞭然であろう。

竹外は、ただ模倣しただけか。そうではない。玄稹の詩が“艶”を含んだ（その象徴として紅い宮花があしらわれている）“静”の詩趣を詠うのに対し、竹外の詩は“骨太”な骨格を持った“動”的な詩趣を詠う。宮女の語る思い出は、自身の若かりしころの華やかな宮廷生活だが、眉雪の老僧の語る世界は、楠木正成だ、正行だ、新田義貞だ、やれ討死だ、落城だという悲憤の物語である。その象徴としての、松柏の響きであり、花吹雪なのだ。ここには見事に日本人の感性に訴える美意識が詠われている。

この時期には、宋詩の流れを汲む、日常の些末な事象を捉えて、日本独自の詩趣を詠い上げたものが多く現れ、同時にやや気格の劣る風も生じてくるが、今は省略に従う。

